久米賞　佳作　受賞作品

寒暖差とある僕の夏

郡山ザベリオ学園中学校
桑名純平

一

一日の気温も上がってきて、熱中症で体調を崩す人が一気に増える季節。

そう、夏。

来年の三月に高校受験を控えた僕は、この夏休みが勝負、と自分に言い聞かせ、受験勉強に張り切っていた。

朝七時ごろ。今日も、自然と目が覚めたので、スッと起き上がれた。心なしか頭もスッキリしている感じだ。生活習慣の乱れは今のところまだ無い。きっと、一学期に毎日コツコツ築き上げた生活リズムの余韻だろう。僕はこのリズムが夏休み最終日まで続くことを願った。

一階へ降り、朝の支度をしに行くと、そこには朝ごはんを調理する母がいた。そして、

「おはようお母さん。」

と僕は素早く、そして元気に挨拶をした。すると、

「あら、おはよう隼吉（しゅんきち）。」

と若干の間の後に穏やかな母の返事があった。

今日の朝ご飯はオムレツだった。オムレツは中身を半熟のまま作るのが難しいことを以前料理して知ったけれど、そこで出てきたオムレツは中身までトロトロで、味だけでなく見た目も食感もおいしかった。

最近の個人的な流行はコーヒーだ。以前母と喫茶店に行ったのがきっかけだ。そのためその事を知っている母は、僕が食べ終わるタイミングを見計らっていたかのように、ちょうどいいタイミングでコーヒーを淹れてくれた。

「お母さんありがとう。これってどこ産の豆なの？」

僕がそう聞くと、

「ん？それ？それはね……ブラジル産だね」

と袋の裏を見ながら母は言った。

僕はそれを聞いて、

「ブラジルはコーヒー豆の生産が世界一だけど、二位はどこだか知ってる？」

と得意気に言った。

「知らない。どこなの？」

「ベトナムだよ。ベトナムコーヒーって結構有名なの？」

「あー知ってるよ。甘いコーヒーなんだってね。けっこう有名なんじゃない。」

「よかったぁ。」

と心の中でつぶやいた。自分の知識が間違っていなかったという安心感を得て、モチベーションが高まった。

むしろ、間違っていたら先が思いやられる。

なぜなら、そこは僕が今、一番時間を費やして勉強している、社会の地理分野だからだ。

コーヒーを飲み終えて、気分も良くなった僕は、自分の部屋に戻って、早速地理の勉強を始めた。

「えーっと、今日は南アメリカ州あたりからかな。」

もう一つの最近の個人的な流行、教科書の本文の音読をして、重要そうな語句には赤のマーカーで線を引いていく。

地形や気候、各国の産業や工業を読み終えた後、今のページをめくった。次は、ブラジルの環境問題についてらしい。僕は続ける。「『熱帯林の破壊』ブラジルのアマゾン川流域では、大規模な開発による熱帯林の減少が問題となっており……『環境保全の取り組み』熱帯林の保全のために、一部を保護地域に指定し、開発を規制したり、違法な伐採を禁止する……」

音読がここで途絶えた。最近の見覚えのある単語が出てきたからだ。

「イリーガルロギングをバン……」

僕は自分でも認めている、しょうもないジョークを好んでしまう人間だ。このようにすぐネタにしたがる。別に何も面白くないし、レベルは浅く稚拙だった。しかし、一学期に学校の英語で知った単語がこうも連続して出てくると、なぜか自然と口角が上がってしまう自分がいた。

そう言い放った直後の部屋に響いたのは、ただのセミの聲で、僕もただの音読を再開した。

「防止するための取り組みもされています。また、二酸化炭素の排出量をおさえる取り組みとして、バイオ燃料で走る自動車も注目されています。っと。」

一通り読み終わってから、バイオ燃料、というワードにだけマーカーを引いた。その他違法な伐採による熱帯林の減少がどうとか、環境保全のための規制がどうとかの内容は、テストには関係ない。たとえ、入試や模試で問われたとしても、なんとなく、答えられるだろうと高をくくっていた。思考の偏りから、

「もう知ってます。っと。」

教科書にツッコミを入れた。良いか悪いかはさておき、音読の最大の特徴はこれだ。色々と思っていること、普段は声に出さないようなことでも、すぐ口に出てしまう。

そんな感じで僕は、もう一度本文の内容を読み返すこともしなかった。それよりも、次のページから始まるオセアニア州へと早く進みたいという気持ちが勝っていた。

正午間もなく、オセアニア州の音読もとりあえず終わりにした。まだ中途半端なところだったけれど、十二時半から塾の夏期講習が始まるから仕方がない。僕は少し早めに行って自習しておこう、と思い立った。バッグに今日の教材をつめこんで、忘れ物がないか一応確認。どうせ忘れ物なんかしてないんだから、この時間がもったいない。変なところにこだわる僕は、こうして急ぎ足で家を出た。

一家に一台しかない僕の部屋のエアコンをつけていたなんてこと頭にはなく、付けっぱなしにしたままだった。

この時、南アメリカ大陸北部に広がるアマゾンの熱帯林は、じめじめするような、湿度を含む、灼熱だった。

この時、日本のとある一軒家、たった一つの個室だけは、今夏の記録的な暑さも吹き飛ばす、これほどまでになく快適な、涼しさだった。

二

夏休みも中盤に差しかかったころ。

「今日はいったい何をした？」

そう自問する。その答えはここ何日もずっと変わらない。僕は完全に生活を習慣化することに成功した。だが、悪い意味での習慣化だ。いわゆる中だるみと呼ばれるやつに突入してしまった。

まずは就寝前。とはいうものの、その時間はかなり長く、晩ごはんを食べてからが起点だ。そして、横たわりながらYouTube三昧。気がついたら午前四時になっていた日もあった。

そうなれば、起床も遅れる。

もう一学期の生活リズムの余韻なんてものはもうすでに過去の歴史だ。

不幸中の幸いというか、夏休みの前日に頑張るぞとて、タブレットの中に入っているゲームを端末から全て削除しておいたおかげで、わざわざまたダウンロードしてやろうという気は起こらなかった。

その時と一緒に、YouTubeのアプリも消したのだけれど、結局、ブ

ラウザ版で開いてしまって、意味はなかった。
自責の念を持ちすぎるのも考えものだけど、こんな生活では、受験生失格だろうかと案じてしまう自分がいる。

三

YouTubeを見て、寝る。そんな万事変わらぬ日々を送っていた今日の出来事。
とある一本の動画が僕のiPadの液晶に、YouTubeのおすすめ機能により、現れる。
「アマゾンの環境破壊の実態」
というタイトルの報道特集が僕の目に入った時、気づいたらその動画が流れ始めていた。
再生している間、不思議と僕は画面から目が離せなくなっていた。しかし、横たわっていた体はうずき始めていた。
その報道特集の動画が何についてだったのかは、タイトルの通りアマゾンについてだ。豊かな動植物、地球の野生が全てつまっているかのような光景をカメラがとらえるところから始まった。
そして、視聴時間が長くなるにつれて、それに伴って内容もまた、日本が何個あっても埋まらないくらい広いアマゾンの森林のように、ずんずんと、深くなっていった。
その報道で語られていく現実というのは、中三の僕にはかなり散々な内容だった。
まず、アマゾンに住む先住民は、正体不明の業者による森林の違法な伐採によって住処が徐々に奪われていっていること。
しかし、僕がさらに深刻だと思ったのは次のことだ。どうやら、アマゾン川の底に眠るお宝、すなわち金。それを目当てにやってくるイリーガルなトレジャーハンターも先住民の長の話によれば、多数いるらしい。
ここまで聞くと、森林の違法伐採と罪の重さは単純明白、どちらも重罪、つまり罪の重さはどちらも同じともいえる。
が、しかしそれでも金の違法採掘者が頭一つ抜けているのが、金の採取の過程で使用される、水銀。その、使用後の水銀をなんと、川にそのまま垂れ流しにしているというのだ。恩を仇で返すとはまさにこの事。
ふと、疑問に思った。そんなこと教科書に載ってたっけ、と。そんな疑問を解き明かすべく、僕は地理の教科書、南アメリカ州の節を注意深く読み直す。
確認した結果、答えはフィフティフィフティだった。
熱帯林の違法伐採については、ちょっと記載があったけれど、金の違法採掘については何も。念のため、資料集も確認したけど、解は変わらずサッパリだった。
だけど、無知だった罪を、教科書や資料集のせいにして償う資格は、僕にはなかった。たとえ、記載があったとしても、以前の僕はきっと、同じ反応をし、読み飛ばしていると確信してしまったからだ。
僕は何か重い気分になり一旦心を落ちつかせるために、起き上がってみる。すっかり固まった体をいきなり動かしたから、体は重かった。
特に用事もなかったけれど、なんとなく、自分の部屋を離れた。
僕の書斎が完全に個人の空間へと成り変わったとき、エアコンのない密閉空間の暑さとともに出てきたのは、
「まじですか……」
というため息まじりの言葉。以前、地理の勉強をしていた時は、その熱帯林の伐採によって困っている人がいるとか、他にも金の違法採掘で水銀がどうとかの問題がある、なんてこと考えもしなかった。僕の物事を勉強するためのはずの脳みそは、受験で点を取るための脳みそだと錯覚していた。受験勉強がはかどらないから焦っていることとか、そんな悩みはちっぽけだとも言えてしまうくらい、何か、大きな気持ちが僕にのしかかった。その大きな気持ちは、言葉にすれば同じ形、同じ発音として処理されても、言葉の感覚としては全くの異物のようにも受け取ることができた。でも、その正体は恐ろしい感じがして、気がつけば疑いの矛先が自分に向いていた。予想はあったけど、もしかすると、この正

体は独りよがりのキレイゴトなのかもしれない、そう感じられた。だから、今、堂々とそれを言語化して語る自信は無い。

僕は小窓の景色から、外の様子を見てみた。日が沈みかけていたことに気づいた。たった今まで澄んでいた、しみじみとさせてくれる夏の空の色も、一瞬にして秋の夕暮れを連想させる、焦げた色に変わった。

部屋に戻る時は、運動神経バチバチだった。部屋の色は爽やかな水色。

布団へ向かってダイブ。

そして……

水銀を川へ流すと、どうなるのか。それは日本の地理の勉強していたから、知っていた。

過去に日本では、太平洋戦争後の高度経済成長による経済的に豊かな時代があった。しかし、そんな時代の一方で、中には、苦しい思いをした人々もいたようだ。

その時代では、経済成長を優先したことで国民の生活環境が軽視されてしまい、結果、さまざまな公害が発生した。教科書にも詳しく載っていたのは、四大公害病についてだ。中でも、今回のアマゾン川で垂れ流されているらしい金属の種類まで酷似している一例が日本で起きていた。

水俣病だ。

これは確か、メチル水銀による海や川の水源の汚染によって起こった公害病だったような。

原因がメチル水銀だったかまでの確証がなかったので、そのことをすぐさまググった。

時間帯的には少し早い、夏の夜の涼しい風のせいか、それともエアコンをガンガンにつけているせいか、はたまたその両方か、

「四大公害病　水俣病　原因」

と、検索する僕の指が少し震えていた。

検索の結果、僕の読みは当たっていた。自分の勉強した知識が生きた、本来は喜ばしい瞬間だった。以前の僕なら喜んでいたと予測できるけど、今回は、モチベーションなんか高まらなかったし、ホッと安心したかと言われると、それには懐疑的だ。むしろ、ますます気分が下がるような不快感ですらあった。

エアコンの設定温度を二十八度まで上げ、夏用の薄い布団にくるまってから、動画の続きを視聴した。

コオロギが鳴きはじめた。

やっぱりか。どうやら、先住民の食生活を支えている、魚。その魚から、水銀が検出されたそうだ。それを毎日食べ続けた人間はどうなるのか、僕にも容易に想像できた。

先住民も、そんな事実は知っている。でも、生活がかかっているから、分かっていながらも、

「食べるしかない。」

そう語っていた。

一体誰の仕業なんだ。真っ先に思いついたのは、違法な採掘、伐採をする人だ。でも、全てがそうとはまとめて断言できない気がした。自分に近しい国、日本。その過去を踏まえると、きっと誰しも人間は富と富を求める飢えのバランスで成り立っていると思った。そのバランスがどちらかに偏った時、それが争いへと発展するのではないかという哲学みたいなことも。

そうなると、その飢えは、違法な採掘、伐採をする人だけの問題でもなく、影に隠れた間接的な原因が隠されている気がする。

一体誰の仕業なんだ。一度は流した物事の裏に隠れた因果関係を、今、知りたくなった。

救いの手。その手のたった一つの細胞のような大きさであってもいい。何か、この日本から、中学生として力になれることはないか。そう模索するうちに、さっきまで凍えていた体はポカポカ、いや、ジンジンしていた。思い切ってエアコンの設定温度を二十五度に下げた。

しばらくして、冷静になった。さっきまで顕著にジンジンが現れていた頭でさえも、冷静になったはずだ。

おかげで、これまでの疑いのモヤモヤは確信に変わった。今なら、言葉で表せる気がした。

まずそもそも、ジンジンとしてしまった訳には、自分の現実への嘆きとは別に、僕自身の私的な訳もあるはずだ。

それはやっぱり、何も知らなかったのに、何も知ろうとしなかった、先住民への罪悪感。

僕が地理の教科書で、アマゾンの環境破壊の問題を見た時、何を思っていただろうか。今年の入試、模擬試験で出題されてもイケる。そんな事だったと思う。全部、自分がテストで点数を取るための勉強しかしてこなかった。

それから、本文を音読していた最中に、もっと、もっと失礼なことを言ったような気がしたけど、どうしても思い出せなかったので、どうか杞憂であることを願った。

受験勉強をする学生としては、決して間違ったことをしているわけでは無いし、それで点が取れればそれで済む話なのかもしれない。

だけど、これから社会へと羽ばたいていく予定である一学生としてを踏まえると、テストの点に関わらず、人としてできるべき必要な配慮というのが欠如していると言わざるを得ない。

でも、実際のところ、今回は仕方がないと自分で自分自身を許す余裕も今はあった。

静かな夕方と夜を行き交う、虫の聲も悪くないなと思った。

動画の再生時間の赤いバーが百パーセントになって、画面には動画のサムネイルが戻った。

この動画があなたへのおすすめとして出てきてくれたこと、そしてこういう系の動画をあまり見ない自分がその動画を開いた、ということを考えると、なんだか全てが必然だったかのようで、また、受験勉強、頑張れる気がした。

が、しかし、やめ時がわからなくなった僕は、またも、そしてYouTubeがこちらの思惑を全て見透かしているかのように、あなたへのおすすめに出てきた、何本ものアマゾンについての動画を、続けて全て見ていった。

こんな生活では、受験生失格だろうか。

―結―

時計は間もなく六の針。玄関からガチャンと二階まで響いてきた。

今日は、ここから山を越え、大きな湖の大外を周回し、また山を越えたところにある、赤瓦の五層の天守閣がうつくしい城が観光名所の市。その市内の大学へ一人暮らしを満喫しながら通っているウワサの僕の兄。紘一がこっちの家に帰ってくる日だった。

そんなことすっかり抜けていて、たった今聞いて思い出した。

今日は外食だろう。六時を回っても一階からフライパンのカンカンという音、水道のジャーという音、いつもなら台所から聞こえてくるはずの音がなかったこと、そして何より久しぶりに家族四人でそろうからと、無根拠に確信していたのがそう思った大きい理由だ。

柄じゃないけど早く顔を見たかったから、ムクっと起き上がった。

今度はちゃんと、エアコンを消してから部屋を出た。室温設定二十五度の涼しい空気の余韻が、あわよくば家中に届くようにと、ドアを開けっ放しにした。

階段を降りていく。ほとんど、快適な部屋で引きこもっていたら、今感じた、この暑さ。一階を想像したら、気が滅入った。

しかし、杞憂だった。換気十分なリビングにいたのは、兄だ。僕は姿を見るなり、

「お帰りなさいませ、紘一兄貴。」

と半分ふざけあり、半分感謝ありで言ったつもりだ。

「あーうん、ただいま。」

やっぱり、家族はかけがえのないもので、さっきの熱も弾け飛んだ。兄はそのあと、目線とかが妙にソワソワしていたのを僕の眼は逃さなかった。それは、僕に対してだけではなく、その場にいた父、母にも言っ

たのだ。父と母も、なんとなく、そのことは解っていたようだった。
「うし、今日はどっか食べに行く？お寿司とか。」
「待ってましたお父さん。」
あとは自然と、いつもの「うつくし鮨」へ行くことに。
くそガキで尖っていた小学生の頃とは違って今日の僕は、時間制限付きバイキングとかじゃなければ、まぁどこでもよかった、というのが本音だけれど。
駐車場に到着して、エンジンが切れる前に見たカーナビの時刻は七時十二分。
店内が混んでいるかとも思ったけれど、これもまた杞憂。すぐにテーブル席へ案内されて、二対二になるように座った。僕の席は、お寿司を受け取りやすい奥側だ。
注文のタッチパネルに触れたのは他でもない、家族の中で最も長い時間タブレットに触れている、僕。
そして、パネルを両手でフィットさせながら、気が利く僕は、みんなにみそ汁、何が飲みたいかを答えるように求めた。
母は一人暮らし歴四か月の兄の食生活を気遣ったのか、言った。
「紘一、今日はあっちでなかなか食べれないものをね。」
「ええと、じゃああおさ汁で。」
「紘一そんなんでいいの？」
「海苔も全然食べないから。」
返す言葉が見つからなかった。
「じゃあ、お父さんとお母さんは？」
「何があるの？」
「ほらこれ。」
手渡しした。正直こっちの方が手っ取り早い。
「お母さんあら汁頼もうかしら。」
「お父さんもそれで。」
じゃあ僕も乗っかって。三つまとめて頼むとて、わざわざ母からタッチパネルを返してもらおうとした時、母がパネルのあら汁の写真を指差しして、こんなことを言い出した。
「身もたくさんついていて、おいしそうね。鮭かな？」
魚。
そうだ。寿司屋に行くとなった時は浮かれていて気づかなかったけれど、今ようやく、この店が魚を取り扱う店だと確認した。
さっきの衝動的発見をみんなに話そうか迷った。
しかし、それは途端にきた急用により、中断された。
「来てさっそくだけど、僕はトイレに行く。」
と兄を見つめながら、捨て台詞のように迫真の面でいい放ち、通路側に座っていた父にわざわざ退けてもらってから、礼を言ってそそくさと席を離れた。家族には、笑点がちゃんと伝わっただろうか。いや、しょうもないな。
そういえば、うつくし鮨のトイレを利用するのは初めてだ。
初見の感想は、少し窮屈（きゅうくつ）にも感じられる個室だったが、それもまた和の色が出ていた。また、壁と床は黒の大理石からなり、洋の文化との融合も感じられた。まさに、うつくし。
手を洗おうとした。水の受け皿の名称が出てこなかったが、土器のようなものだった。小さな部屋での新たな体験。これもまた。
席に戻ってからみんなに聞いてみた。どうやら「瀬戸物」というらしい。言われてみれば、しっくりきた。
心も体もすっかり落ち着いてきた。お手洗いへ行って色々と本当によかった。
だって、あの話について考えた結果、やっぱり魚を取り扱っているお店で魚の水銀ガーと話されるのはお店に良い迷惑だし、寿司を楽しんでいる矢先、そんな重い話を突然語られても反応に困るという答えに至れたからだ。
僕は気持ちを切り替え、おいしいお寿司をいただくことにした。地中海産の大トロ、トロサーモン、活ほたて……。食べたいと思ったものは

遠慮せずに注文した。
数分後、大量のお寿司がズラリ。立派な長い寿司下駄の上で輝く海のお宝。運ばれてきた時、みんなはお寿司にも気にはかけていたが、本当に食べきれるのか、という、毎度小食の僕に対する懐疑的な目線もあった。そのことを刹那の中で感じ取った僕は一度不安に陥ったが、いざ食べてみれば手が止まることはなく、これもまたまた、杞憂に終わった。
お勘定。今回は一万円に行かなかった。なのに、満足感は最高だった。いつもの通り、あとは父に任せて、三人で先に車へ戻った。
外は少し肌寒いくらいスッキリとした、これぞ夏の夜、といった空気を感じた。
家までの帰り道。僕たちは、最近のうつくし鮨はネタが前よりも小さくなったとか、あまり風評のよろしくない話題で盛り上がっていた。
帰路はまだ続く。会話も段々と落ち着いてきた。僕は、街明かりに照らされた川の景色を見つけ、いろいろと考えさせられた。
アマゾンの環境破壊とそれにより先住民が直面している困難。実際、中学三年生の自分一人に何ができるのか結構真面目に考えたつもりだが、おそらく今できる行いなんてものはゼロに等しい。そんな現実主義者になってみたりもした。
ただそれでも、一つ貫くと決めた志、揺らぎないものがある。
それは、このアマゾンの環境問題をどうにかしたいと思っているような今の気持ちを、大人になるまで忘れないようにすること。
よく、過去を忘れて、今や未来ばかり見たり、逆に過去にばかり囚われて辛くなったりする人がいる。僕もそういう時があった。人間だれしもあるだろう。
そんな僕が考え抜いた末は、過去も、今も、未来も、バランス型で大切にするべきだという主張だった。
明日になれば、今日の考えも変わっているかもしれない。たとえそうでも、悔いの念は一切ないと思う。
明日の僕がつくられるのは、今日の僕がいたから。大人になった時に、そうやって自分を辿っていくのも面白いのかもしれぬ。
全て必然で、結ばれているはずだ。
また、哲学に近い、沼にハマってしまったかもしれない。
そんなことで、家に着いていた。外とは裏腹に家の中はまだ、暑かった。部屋のドアを開けっ放しにしておいたから、出かける前こそ、あふれるほどあった部屋の冷気は、必然的に相殺された。
それでも、僕はエアコンをつけることはしなかった。
その代わりに、カーテンを勢いよくサイドにふっ飛ばし、ガラガラと窓を全開にした。
聞こえてきたのは虫の聲。以前は壁まで貫通してくるただのうるさい音だった。
でも改めて、やっぱりいいな。そう思った。
今日はこのままにして、もう寝よう。虫なんか特に詳しくない僕は、今のはコオロギかな。今度はキリギリスだ。という具合に、独りで予想大会を始めた。この後、僕は夏の涼しさというのを本当に体感しながら、めちゃくちゃ快眠した。
人間が無防備に寝ている間。それはそれは、蚊にとっての楽園だった。それに気がついたのは、昨日とはまた違った今日を開始するべく、階段でステップしてからリビングに入り、兄にネタにされることが確定した時のことだった。
しかし心機一転。これも夏限定のことだと切り替えた。
なんだか今日は、受験勉強、できそうだ。
こうして、いつものブラジルコーヒーを飲んだところから、僕の今日が始まった。
最後に、どこか僕の夏を体現したような、一句をここで。

僕の夏
万物流転
常ならん

どこかで聞いたような言いまわし。いや、音読したような、この言いまわし。
そうだ、平家物語だ。中学二年生のとき、国語で暗唱テストをやらされた日々も、もう去年の出来事だ。
でも、この夏。僕の思い出は、新たに上書きされた。つまり、アップデート。
いや、グレードアップなのかもしれない。
思えばこの夏。ダウンすることもあった。
しかし、なんだかんだアップ。そうやって無事、今回は例年とは違う夏休みを過ごせた。僕の夏はまだ少し続くはず。でももう、だいたい終了。やっと安心は安堵に変わった。
なぜならこの夏。大の苦手教科、社会、歴史。その教科書には一度も触れなかった。
でも、塾の夏期講習のおかげで、
「平家物語は鎌倉時代の軍記物。」
少し不安はあったけど、出した解は当たっているか、間違っているか、確率はフィフティフィフティといった手応えがあったからだ。
やっぱり受験生失敗(ばい)、だろうか。さほどその表面的な解は、気にならなかった。
そんなことよりも、YouTubeの利用方法が
「受験勉強で欠かせないのは基礎の土台」
とか、
「モチベーション、高めるためには、模試の結果で一喜一憂するな！」
とかの動画見放題に見っ放して、結局なにもしていなかった去年の自分。そこから、
「アマゾンの環境破壊の実態」
というたった一つの動画だけで、自分の流したいたことに気がついて、そこから、と結ばれ、自分のこと。大きくなって地球のことへと発展して考えることができた。
結局僕は、ちょっとだけグレードアップした自分が大好きなだけなのかもしれない。
だけど。今はまだ、今のままでいいかな。
だって。あっという間に過ぎさった、僕の夏だもの。僕が本当に大きくなれるのも、きっと。最後まで寒暖差とあって、今ここで。

（指導教諭／和田山　琴　子）

《作品の意図》

僕がこの小説を書き終えた時。その直前には、どんなミステリーを残そうか。そんなことで頭がいっぱいでした。今回が、小説を書いた初めての作品でした。そんな僕の作品を読んでいただいて、少し難解で、読み留まってしまうような箇所がありましたら、もう一度最初から読み直せば、合点がいく可能性があるかもしれません。
作品を両親に読んでもらうと、表記の問違いや、主人公の意図が伝わっていないのではないかという指摘をもらい、それらのアドバイスを受けて、作品を推敲することができました。
僕は、文学っておもしろいなと思っています。そして、この小説を書いた僕の夏は、忘れられない夏になりました。

《作品の寸評》

構成に工夫が見られる。一章の導入でブラジル産コーヒーを登場させ、受験勉強で学んだアマゾン流域における熱帯林伐採に結び付けている。二章には、メインとなる三章への橋渡しとでもいうべき役割を与えている。三章では、アマゾン川底に眠る金の違法採掘に伴う水銀から、日本の水俣病を想起している。結章では、家族で訪れた回転寿司店の魚を目の前にして水銀、水俣病、アマゾンの環境問題を改めて考え、地球の未来、さらに自分の将来に思いをはせる。
一家の中で「僕」の部屋にのみ設置されているエアコン。一章で、つ

けっぱなしのまま塾に向かった「僕」が、結章では、つけっぱなしにすることはなかった。主人公の変容を、この行動に表した点は絶妙である。

「僕」は、点数を取るためだけの受験勉強に疑問を抱き、「受験生失格だろうか」と自問しながらも、日本の未来のために広く深く学習することの意義や重要性に気付いた。目先の成績だけに捉われることなく、広い視野に立った主人公の向学心に好感がもてる。

作者独特の表現が散見された。例えば、「その大きな気持ちは、言葉にすれば同じ形、同じ発音として処理されても、言葉の感覚としては全く異物のようにも受け取ることができた。でも、その正体は恐ろしい感じがして、気がつけば疑いの矛先が自分に向いていた。～略～堂々とそれを言語化して語る自信は無い。」「人間は富と富を求める飢えのバランスで成り立っていると思った。そのバランスがどちらかに偏った時、それが争いへと発展する」「よく、過去を忘れて、今や未来ばかり見たり、逆に過去にばかり囚われて辛くなったりする人がいる。～略～過去も、今も、未来も、バランス型で大切にするべきだ」などである。

全体を通して、創作意欲や作者の熱い思いが伝わってくる作品である。

（審査員／宗　形　幸　子）